



で多くのテーマを提供するために、タイトなスケジュールとなってしまいました。参加者は新たな臨床に触れ、実習体験を楽しみ、どのテーマにおいても一生懸命な参加者の姿



嚙下内視鏡検査の体験

を見るにつけ、忙しくも充実した日々を過ごすことができました。プログラムの成果 今回の参加者は、歯学部を卒業して間もない歯科医や、歯科医ではなく歯学研究に従事するシニア教員など、さ



動物実験の見学



培養実験の見学

まざまに異なるバックグラウンドをもっていましたが、超高齢社会の日本において歯科臨床や歯学研究に求められるものを各自の立場で感じてくれているようでした。また日本を訪れたいですか、という質問に対しては、大学院生として、研究者としてぜひ戻って来たいという者が多く、10名中9名が Definitely Yes、1名が Yesとの回答でした。さらに、嚙下障害や動物を対象とした神経生理学的研究が、歯科医療や歯科医学とどのように繋がっているかを実感したという意見も多く聞かれました。10日間という期間が短かすぎたとの声もありましたが、結果として、参加者全員から本プログラムに対して大変満足したとのコメントをいただきました。

今後の展望

現在、日本の高齢者率は27%であり、世界一の超高齢社会となっております。台湾では12%、タイでは11%と、国の事情は現在の日本とはまだ異なるものの、両国ともに近い将来、日本と同じ超高齢社会の諸問題が迫ってきていることを強く感じているとのことでした。



修了式での集合写真

今年の年末から来年にかけて、台湾とタイでも高齢者医療や摂食嚙下障害をテーマとしたシンポジウムが開催されることが決まり、新潟大学も参加する運びとなりました。本プログラムが、両国、両大学との学術交流を一層推進させるために役立つこととは間違いありません。今後は更に他のアジア諸国との交流も始まるものと期待しています。

最後に、本プログラム実施の機会を与えていただいた、さくらサイエンスプラン、そして本プログラムの実施を支えていただいた本学の教職員の皆様に深く感謝申し上げます。